

第6章 「鉄子」とは

本章では「鉄子」と称される存在について検討を加える。なお、本章の執筆担当は女性であり、鉄子とみなされることも多々ある¹ため、随所に自己の経験や実感のおりまざった記述である点は留意されたい。

1. 「鉄子」の定義

『現代用語の基礎知識 2010』によれば、「鉄子」²とは「鉄道マニアの女子」である。

「鉄子」というワードが世に広く認識されるようになった要因は、何といっても漫画『鉄子の旅』³だろう。連載開始当初（2002年）はほとんど認知されていなかった⁴「鉄子」というワードが、連載終了直後の2007年には流行語大賞候補にノミネートされるまでに至ったことを考えると、この作品が世に及ぼした影響は非常に大きいと言える。



図 2-6-1 『鉄子の旅』 ©Naoe Kikuchi / Hirohiko Yokomi 2005

¹ 「多々ある」という記述に対して感じてきた違和感は4節で述べる。

² 『現代用語の基礎知識 2010』における見出し語は「鉄女」であり、この定義の後ろに「鉄子ともいう。」と記されている。我々は「鉄女」よりも「鉄子」の方が一般的な表現だと考えているので、本研究誌では「鉄子」に統一することにする。

³ 菊池直恵氏によるノンフィクション漫画。2002年から2006年まで『週刊ビッグコミックスピリッツ増刊 IKKI』『月刊 IKKI』（小学館）に連載された。単行本は全6巻。

⁴ 認知度こそ低かったものの、「鉄子」というワードの存在自体はこれ以前の時期にも確認できる。例として、山口よしのが『名物！たびてつ友の会』読者ページ。

2. 「鉄子」の性質

『鉄子の旅』は、旅行・観光はたまた駅弁等グルメに魅力を感じるごく普通の女性（作者）が、筋金入りの鉄道ファンである男性の案内のもと、鉄道それ自体を目的とする旅に出かける、という内容である。とすると、どうやら『鉄子の旅』における「鉄子」は一般に連想されるような「鉄道オタク」を意図したワードではなさそうだ。

また、「鉄子な写真家」として著名であり、『鉄子の旅』作中にも登場する矢野直美⁵氏の作品は、鉄道が主役の「いかにも鉄道写真」というよりは、風景の一構成要素として電車を写したものが多い。やはり、「鉄子」は「ガチガチの鉄道ファン」ではなく、「鉄道に興味のある普通の女性」のようである。

また、『負け犬の遠吠え』で著名な、作家・エッセイストの酒井順子⁶氏も、『鉄子の旅』に登場したが、氏の鉄道紀行作品も横見氏や川島令三氏の書く「ガチガチな鉄道モノ」ではなく、軽妙な文体と読みやすさで男性鉄道ファンの作品とは一線を画している。

つまり、鉄道に全く趣味の関心がないわけではない「ライトな」ファン層に属する人々のうち、女性を「鉄子」と呼ぶのではないだろうか。

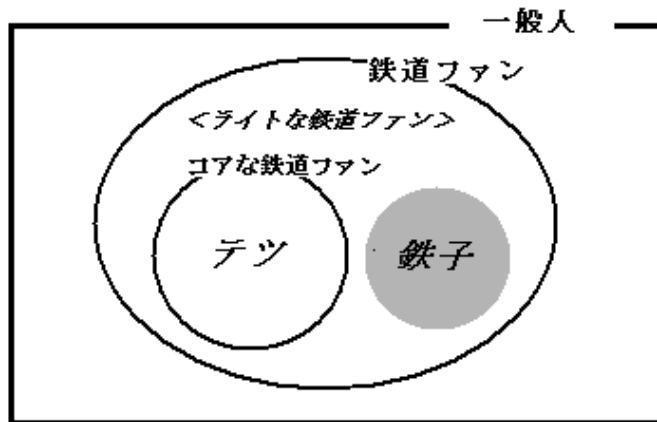


図 2-6-2 「鉄子」の属性

⁵ 1967年、北海道生まれ。作家、鉄道写真家。

⁶ 1966年、東京都生まれ。エッセイスト。女性鉄道ファンの先駆的存在として知られる。

3. 趣味傾向から考察する「鉄子」

豊田巧⁷氏は、著書『鉄子のDNA』（小学館、2009）において次のような興味深い分析を行なっている。

「鉄子の興味対象ですが、実は少し偏った傾向が見られます。〈中略〉 乗りテツと撮りテツに近い趣味の方が鉄子には多いのです。」

「もともと女性は、電車で国内旅行をしていたのです。〈中略〉 もともと旅好きの女性が、そのまま乗りテツになったパターンが多いようです。」

「撮りテツの鉄子もまた、女性に特有の趣味から派生したと考えられます。〈中略〉 女性はもともと写真を撮ることも大好きだからです。〈中略〉 記念撮影のようなライトな写真が好きなのです。」

女性のごく一般的な趣味の延長線上にたまたま鉄道がのった結果として、鉄道に興味を抱いた女性が鉄子だというわけである。

4. 自己認識と他者からの認識の乖離

さらに、豊田氏は次のように述べている。

「撮りテツと乗りテツが多いというのが鉄子の第一の特徴ですが、もう一つ大きな特徴があります。それは、『自分はソフト鉄⁸です』という自覚の人が大多数を占めていることです。」

鉄子本人は、自分自身を決してコアなファンだとは評価していない。しかし、鉄道趣味界は長らく男性世界だと認識されてきたため、他者の視点では「この女性は鉄道が好きなのか、めずらしい！」と印象に残りやすい（当然、ライトなファン層に属する男性も数多く存在するはずだが、彼らに対しては男性であるがゆえ「鉄道ファンか否か」について、女性に対して高いハードルが課される結果、あまり印象には残らない）。その結果、鉄道趣味をもたない一般人目線では、次の集合図の着色部に属する存在だと認識されてしまうのだろう。

⁷ 1967年、奈良県生まれ。ゲームメーカータイトーの広報担当。大ヒットゲーム『電車でGO!』の宣伝などを手掛けた。

⁸ ソフトな鉄道ファンのこと。たとえば『鉄子の旅』中で、女優の村井美樹がソフト鉄であるとの発言をしている。

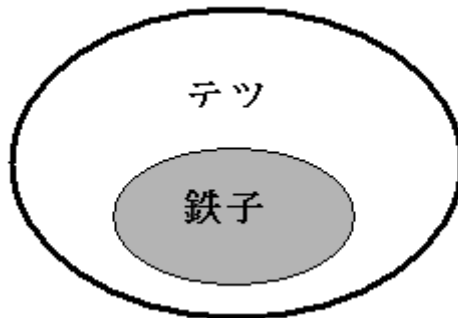


図 2-6-3 一般人から見た「鉄子」の属性

筆者は自分が鉄子であるとは到底思えなかった。なぜなら、旅好きから派生した乗車好き + 駅弁好きではあるものの、JR 乗車率⁹は 40%程度とさほど高くなく、さらに言えば模型や車両に全く精通していない。さらに、筆者の周りのテツと称される男性たち(鉄道研究会員たち)はみな JR 乗車率が高いか、模型や車両にくわしかったりするからである。

しかし、周囲の鉄道ファンではない人々からは、鉄道研究会所属を明かすまでもなく、鉄道での旅行が好きだと話した段階で「へえ、鉄子なんだね」と認識されてきた。

5. 分類不可能性から観念される「鉄子」

鉄道ファンではない一般の人々だけではなく、コアな鉄道ファン(テツ)目線でも、ライトファンに対する認識の男女差は存在するようだ。

キャリアの長い鉄道ファンにとって、(たとえライト程度のファン具合であっても)女性の鉄道ファンは非常に貴重であり、歓迎の気持ちが強くなる。他方、男性のライトファンは貴重も何もないので、「あの程度で「鉄道オタク」だとはちゃんちゃらおかしい」と逆に見下すことさえある(文化的正当性を巡る闘争。もちろん、女性のライトファンに対して同様のネガティブな態度をとる鉄道ファンも存在する)。

また、前項で鉄道ファンではない一般の人々が課す、「鉄道ファンか否かの

⁹ JR 旅客鉄道全線に占める、自身の乗車率。JR 完全乗車(完乗)を念頭にいた数字で、各種ホームページで数値を計算できる。

ハードル」が、女性に対しては低く設定される旨を述べた。その原因は女性ファンの「ものめずらしさ」にある。他方、鉄道ファンも女性を歓迎したい気持ちから、女性に課す鉄道ファンとしてのハードルは低めに据え置いているのだ。

やはり、鉄道ファンとしても、これまで男性世界だった鉄道趣味界の女性人口が増加することは喜ばしい。しかし、ここで困った問題が生ずる。

第2部2章4節で述べたように、テツは「分類厨」的性格が強い。一方で、女性の鉄道趣味の内訳が「乗り鉄・撮り鉄」的趣味で大部分を占められていることは3項で触れた通りだが、個々の女性が「乗り」か「撮り」か、どちらか一つだけに傾倒するパターンはほとんど想定できない。

つまり、女性の鉄道ファンが備えている「旅行も写真も駅弁グルメも全部大好き！全部楽しみたい！」という根源的な幅広さゆえ、従来のはっきりとした趣味傾向による分類が不可能なのである。

この点に不都合を感じた「分類厨」たる鉄道ファンが、新たに設定した分類区分、それが「鉄子」なのではないだろうか。

すなわち、「鉄子」とは、テツ達の思いが錯綜した結果、女性だけに開かれた「鉄道学部¹⁰教養学科」なのである。

6.まとめ

第5章において、昨今の鉄道ブームの実質は「これまで表面化こそしていなかったものの潜在的には存在していたライトなファン層の「鉄道ファンとしての自己認識の閾値」が下がった」ことなのではないかと述べた。

本章では、どうやら女性に対しては他者（鉄道ファンからも一般の人からも）から課されるハードルが低いらしいことを主張した。

「鉄道ブーム」の、「閾値を下げる」環境が、女性の「鉄道ファンとしての自己認識の閾値」をさらに下げているように思われる。

第三次鉄道ブームを象徴する存在とも言える「鉄子」。(筆者も含めた)「鉄子」と呼ばれる人々が、思いのほか「普通の女性」であるということは再三述べてきた。裏を返せば、どんな女性も「鉄子」になる潜在的可能性を大いに秘めている。鉄道趣味界における女性人口のますますの増加を願って、本章の結びとしたい。

¹⁰ 『鉄子の旅』中で、タレントの眞鍋かをりが鉄道趣味領域の広さをさして表現した言葉。